

『新約聖書』のキリスト論 II

—ジェームズ・デニーと対話しつつ—

松浦義夫

第一章 パウロの書簡

キリスト教の歴史の中で、使徒パウロはまことに重要な位置を占めているということに異論のある者は、ほとんどいないといっても過言ではなからう。『新約聖書』のなかで、パウロの名を冠した書簡は二三通に及んでいるし、しかも彼の書簡が『新約聖書』の文書のなかでも最も初期に属するものである、ということからも彼が如何に重要な位置を占めているかが理解できよう。パウロの名を冠した書簡のなかで、現在のところパウロ自身が著者であることがほぼ確実視されている書簡を、『新約聖書』に記載されている順序に従って列挙すると、次のようになる。『ローマ人への手紙』、『コリント人への第一の手紙』、『コリント人への第二

の手紙』、『ガラテヤ人への手紙』、『ピリピ人への手紙』、『テサロニケ人への第一の手紙』、『テサロニケ人への第二の手紙』、『ピレモンへの手紙』以上八書簡である。パウロの名が冠されているが著者がパウロ自身ではなく、パウロの思想に影響を受けた者か、パウロの弟子にあたるような人物によって書かれたものとされている書簡は、『牧会書簡』と呼ばれている『テモテへの第一の手紙』、『テモテへの第二の手紙』、『テトスへの手紙』の三書簡である。そして、パウロの名が冠されているが著者がパウロ自身ではないとする多数派と、パウロ自身である可能性が高いとする少数派に分かれる書簡は、『エペソ人への手紙』と『コロサイ人への手紙』の二書簡である。

ところでジェームズ・デニーが『イエスと福音』を

書くに際して、パウロ自身の書簡として採用しているのは、『牧会書簡』と『エペソ人への手紙』を除く、残り一一書簡であるように思われる。そうすると問題になるのは、『コロサイ人への手紙』の取扱い方について、ということになる。後ほど判明することになるのだが、ジェームズ・デニー自身は、この『コロサイ人への手紙』において見ることで、パウロの「キリスト論」を、パウロの「キリスト論」の中でも最も発展した段階のものである、というように理解しているのである。したがって、我々はこの点を踏まえたいので、ジェームズ・デニーと対話しなければならぬということになるだろう。もっとも、現在この『コロサイ人への手紙』を、パウロ自身の著したものであるとする学者たちも、パウロ自身の影響を受けた者によって著されたという点には、異論がないのであるから、我々がジェームズ・デニーの解釈を取り扱うに際して、それほど神経質に対応する必要もないであろう。このような点を考慮してもなおジェームズ・デニーは、今日の我々に対して語るべき言葉を持っている、ということの後ほど明らかになるであろう。

約聖書の「キリスト論」を考察するに際して、如何なる意味を持っているといえるのであろうか。我々が既に考察した、「初代教会の教説におけるキリスト」に関する事項においても明らかになったように、初代教会が保持していた、「最も初期のキリスト論」とも呼びえる事柄を我々が認識するために用いることのできる資料は、『使徒行伝』の初めの方の箇所に見られる、ペテロの説教である。この『使徒行伝』は『ルカによる福音書』のいわば第二部に相当する文書であり、著者は伝承によると「ルカ」という人物である。このルカが、「わたしたちの間に成就された出来事を、最初から親しく見た人々であって、御言に使えた人々が伝えたとおりの物語に書き連ねようと、多くの人々が手を着けましたが、……わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、ここに、それを順序正しく書きつづつて……ことにしました」(『ルカによる福音書』一・一一三)と記しているように、『使徒行伝』に描かれているペテロの説教も、福音書記者ルカが直接聞いたものではなく、伝承を受け継いでさらにそれをルカ自身の考えによって、「順序正しく」書くために、『使徒行伝』のいまある箇所に、編集の結果として記載されたものである。そうすると最も初期の「キ

リスト論」といっても、イエスの最初の弟子たちの肉声によるのではなく、それが伝承され、されに福音書記者ルカの編集の手が加えられた文書から、いわば推定することによって得られた結果として、我々に対して提示されたものである。しかしパウロの書簡は、いわばパウロの肉声を伝えるものであり、しかも『新約聖書』の諸文書のなかで最も初期に属するものである、ということは、推定によるのではなく直接的に、初代教会に属する一人の人物による「キリスト論」を我々に提示してくれている、といえることになる。このような意味においても、パウロの書簡は、我々の考察に對しても、最も重要な資料といえることにならう。

ジェームズ・デニーはこのようなパウロの書簡の持っている意味、いやむしろそのような書簡を書いた人物であるパウロ自身が、我々の考察にとってどのような重要性を持つのかを、教会史的な視点をも踏まえて次のように記している。³⁾

「彼（パウロ）がイエスと面識があろうとなかろうと、また彼によるキリスト教への影響が、有害なものであつたらうがなかろうが、彼がキリスト教の歴史において最も重要な人物であつたことには、変わりはないからう。彼は他のどの使徒よりも、この世の生活にお

ける、宗教としてのキリスト教の占める位置の獲得に對して、多く働いたのであり、この位置が失われる危機の時にあつては、彼は他のだれよりも、再びその位置を奪い返すために働いたのである。福音主義的復興の炎は、ルターやウエスレー、チャーマーズといった力溢れる人々の内で、パウロのキリストに對する証言のうち燃える、消すことのできない炎によって、再び新たに灯し続けられてきているのである。この点からいって、それが正当化されるか否かというような問題からは全く離れるとしても、使徒パウロの信仰と生活においてキリストが実際に満たしていた位置を確認することは、なによりも重要な事柄といえよう。すなわちキリストは、パウロにとって、我々が初代教会の信仰において見てきたキリストと同じなかどうか、ということが問題なのである」。

なおここで名前を挙げられているチャーマーズとは、ジェームズ・デニーの前の世代に属する、スコットランドの自由教会の有名な指導者であることを指摘しておく。

第二章 使徒パウロ

第一章において記したように、『新約聖書』にパウ

ロの書簡として記載されている文書は、我々が最も初期の段階におけるキリスト教に関することを知るために、最も重要な資料となるわけである。それではこれらの書簡を書いた人物とされているパウロは、一体どのような人物なのであるか。『ガラテヤ人への手紙』

においてパウロは、彼が異邦人の使徒となった経緯を語っており、『使徒行伝』第九章においてもその切っ掛けとなった、いわゆる「ダマスコ途上におけるパウロの回心」についての出来事が描かれているが、それらをもとにパウロなる人物についてかなり大雑把ながら紹介すると、次のようになる。彼はタルソという小アジアの都市出身のユダヤ人であること、ローマの市民権を持っていたこと、かつてはパリサイ派に属しキリスト教会に対する熱心な迫害者であったこと、生前のイエスとは多分面識を持っていなかったと思われるが、キリスト者たちを捕縛するためにダマスコへの道を急いでいる途上で甦りのキリストに出会い、突然の回心を遂げ、異邦人の使徒たるべき召命を受けたということなどである。これらのことから理解できるように、初代教会の人々の中にあつて、パウロはまことにユニークな存在といえるわけである。ところでジェームズ・デニーは、『イエスと福音』の第一部のなかの

「パウロの信仰におけるキリスト」という項目において、我々が『新約聖書』の「キリスト論」を考察するうえで、パウロの持っている重要性を、次のように指摘している。⁸⁾

「パウロ自身がイエスのことをどのように考えていたかということは、たいした問題ではない。なぜなら、パウロはイエスと一面識もなかったのだから、というような思想が、広く行き渡っている。我々が見てきたような、ユダの欠けた後の後継者が選ばれる時に、重要視された、イエスの公生涯の期間中に彼と行動を共にした、といわれるようなイエスとの面識をパウロは持たなかった。彼にとつてのキリストとは、したがって、一人の人間というより、むしろある理想的また神学的存在でありえざるをえなかった、というわけである。たしかに彼は、彼の書簡の一つに見られる、難しい表現で書かれている事柄を根拠とするような宣告を受けてさえいる（『コリント人への第二の手紙』五・一六）。つまり、エルサレム教会において重要視されていたような種類の知識を、彼が軽んじているとされているのである。パウロの神学に対してなされている、最近の批判的研究の多くは、『使徒行伝』にみられるパリサイ主義的キリスト者と一緒になって、パウロに

は、一人の使徒としての欠くべからざる資格が欠けていたと、実際には想定している。このような根拠に基付き、パウロの影響が速やかに衰えていったことを、喜びをもって受け止めている、例えば、グンケルのような学者さえいるのを、我々は発見する。パウロの福音を大幅に中和した、『共観福音書』が前面に進出し、教会において優位を築くようになることが、もしもなかったとしたら、歴史的に善き働きをする勢力としてのキリスト教も、万事休すということになっていたであろう。ところで、我々の前にある疑問が、パウロはイエスについて何を知っていたのかということである。イエスについては、初代キリスト教社会において生きていたのであり、そこにおいては、イエスについて知りうる事柄のすべてが存在しており、彼がどれほど堅く決意し頑固になって頑張ってみても、時々そういわれているような程には、イエスに関して無知でありえたはずがない。彼の最も親しい友であり、彼の生涯のそれぞれの時期の同労者である者たちのなかには、『第二福音書』と『第三福音書』のそれぞれの著者である、マルコとル

カが存在したのである。彼らが、パウロに属する教会におけるカテキスト（信仰問答教師）として活躍していたとする、ライト氏の考えには、その意見に賛成して語るべき多くの事柄がある。この彼ら、つまりマルコとルカが教えていた内容を、使徒であるパウロが知らなかったというようなことや、それでも彼は気にも留めなかったというようなことは、考えられるであろうか。もしこのような推論が、あまりにもアプリアリ（先験的）なもの、つまりあまりにも単なる可能性にのみ基づきすぎていて、説得性に乏しいとするなら、議論の余地のないほどのものとするためには、フェイネの著作『イエス・キリストとパウロ』のような、使徒パウロの書簡類の詳細な調査を必要とする。いづれにせよ、パウロは、如何なる意味においても、イエスに関して無知であったはずはない。もし我々の持つ『共観福音書』が、単なる想像による作品ではなく、伝承が純粋に保管されているものであるなら、そしてこのような説が真面目な学者たちによってなされている、唯一の見解なのであるが、その時には、これら『共観福音書』の中身に関する基本的部分については、我々が精通しているほどには、パウロ自身も精通していたに違いないはずである」。

つまり、パウロは初代キリスト教会という環境のなかに生活していた人物であり、しかも彼の同労者とされているマルコとルカは、『第二福音書』と『第三福音書』の著者とされているのであるから、これらの福音書において保存されているイエスに関する諸伝承に

関しては、パウロ自身が精通していたはずである、というわけである。現在『第二福音書』の著者に関して、様々な見解が存在しており、ここで指摘されているジェームズ・デニーの見解をそのまま受け入れるわけにはいかないかもしれないが、少なくともルカに関しては彼の指摘は当を得ているというべきであるのだから、パウロと初代教会において流布していた伝承との関係は、指摘されている通りであろうと考えられる。つまり、パウロは生前のイエスとは面識を持っていなかったとしても、初代教会全体に広く流布されていた伝承を通して、生前のイエスに関する知識を得ていたはずであるというわけである。そうするとパウロが彼の書簡のなかにおいて語っている事柄も、それらの伝承をいわば前提として語っているといえることになる。このことは、我々が目指している「パウロのキリスト論」を認識するにさいして、まことに重要な意味をもってくることになる。すなわち、『新約聖書』

の文書のなかで最も初期に属するパウロの書簡においては、生前のイエスに関しては頭には述べられていないとしても、少なくとも前提とされていることには間違いない、ということである。

ところで我々が調査しようとしているのは、『新約聖書』のキリスト論であり、ただいまはそのなかの「パウロのキリスト論」であるわけであるから、まず調査すべき事柄は、パウロ自身がキリストをどのように理解していたのか、ということになる。そして、そのような理解の仕方が、生前のイエスと連続するものなのかあるいは断絶するものなのか、という事柄は、次に取り扱うべき問題として残されているわけである。つまり、ただいま我々が取り扱うとしているのは、ジェームズ・デニーのいうところの「キリスト論に関する二つの疑問」のうち、第一の疑問についてである。すなわち、『新約聖書』の著者たちが、キリストに対して絶対的な位置を与えているということが、果たして事実であるといえるかどうかという疑問についてである。そしてそのような『新約聖書』の著者たちのなかでも、最も重要な人物の一人であるパウロの場合を調査しようと目論んでいるわけである。

第三章 パウロの信仰におけるキリストの位置

パウロはイエスをどのように理解していたのであろうか、このことに関する、ジェームズ・デニーの言葉を『イエスと福音』から引用すると、次のように記されている。⁶³

「パウロのキリスト者としての生涯は、甦りの救い主が彼の前に出現したという事柄とともに始まったのである。彼にとっても、ペテロにとつてと同様に、十字架につけられたイエスは、高挙という事実により、主またキリストとなったのである。彼の心に残る、イエスの出現の姿の持つ輝きを思い起こして、パウロはイエスを、〈栄光の主〉と呼んでいる（『コリント人への第一の手紙』二・八）。この姿においてイエスを受け止めることにより、その点に関してはすべての信徒たちが一致できる、キリスト教の基本的信仰告白がなされることになるのである（『コリント人への第一の手紙』一二・三、『ローマ人への手紙』一〇・九）。

ここで「キリスト教の基本的信仰告白」とされているのは、参照箇所の一つである『ローマ人への手紙』によると、「すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスを

よみがえらせた」と信じるなら、あなたは救われる」ということである。このことから理解できるように、「イエスは主である」ということと、イエスが主であるという告白がなされる根拠は、「イエスの甦り」という事実である、というのがパウロ自身のキリストに対する理解の根本的内容であり、しかもこのような理解は、初代教会のすべての信徒たちが一致して保持したものである、ということである。さらにこのことに付け加えれば、「イエスの甦り」という事柄には、イエスの復活から高挙に至る一連の事柄が含まれているということである。以上が、パウロの理解するキリストの位置に関する基本的な事柄である。次に我々は、パウロの書簡において描かれている具体的内容に即して、パウロの信仰においてキリストがどのような位置を占めていたのかについて調査することにする。

ジェームズ・デニーは、パウロの信仰においてキリストが占めていた位置を調査するにあたって、パウロによって書かれた最初の書簡から着手しているが、我々も彼に従って調査を進めることにしよう。パウロによって最初に書かれた書簡は『テサロニケ人への第一の手紙』であるが、その書き出しの言葉は次のようになっている。「パウロとシルワノとテモテから、父なる神

と主イエス・キリストとにあるテサロニケ人たちの教会へ。恵みと平安とが、あなたがたにあるように」(一・一)。つまり、パウロはキリスト教会を、その存在を父なる神と主なるキリストに負っている存在として記述しているのである。これは、我々が既に『使徒行伝』二章に記載されている、「ペテロの説教」において見たのと同じような位置を、イエスに対して与えている表現といえよう。つまり、パウロにとって、イエスが歴史上に実在した人物であることを疑問視するような考えは、全く思いも寄らないものであるということ、ペテロの場合と全く同様であるのだが、キリスト教会が生きている根拠となっている「恵みと平安」について考えを巡らす時には、その歴史上の人物であるイエスを、そのような「恵みと平安」を自分たちキリスト者と共有する存在としては考えたりはしていないということである。パウロは、本能的にまた自発的に、このイエスを、キリスト教会が存在の根拠としている「恵みと平安」が因って来たるところの「父なる神」の傍らに置いて考えているわけである。このことに関してジェームズ・デニーは、「御父を源泉とするなら、キリストは、これらの祝福を伝える水路である。御父と御子は、救いをもたらす拠り所となる神の力と

して、一体となって人類に対峙しているのである、⁵⁴ というように表現している。すなわち、『新約聖書』の中でも最初に書かれた文書によって提示されているキリストは、人類の救いとの関わりにおいて、神と共に絶対的な位置を占める存在として理解されているということである。

次に我々が取り扱うべきパウロの書簡は、『コリント人への第一の手紙』である。この書簡において特徴のある箇所としてジェームズ・デニーが引用しているのは、一五章二八節であるが、その箇所においては次のように記されている。「そして、万物が神に従う時には、御子自身もまた、万物を従わせたその方に従うであろう。それは、神がすべての者において、すべてとなられるためである」。パウロは、彼自身の信仰においてキリストの占める位置を表現するのに、しばしばただ一言で表現することがあり、その例としてあげられるのが、この箇所における、何の修飾語も加えずに表現された「御子」という表現の仕方である。この箇所はしばしばキリストの位置を過小評価したり軽視するような見解を正当化するために利用されるのであるが、このようなやり方について、ジェームズ・デニーは次のように反論している。⁵⁵「このようなやり方ほど

馬鹿げたものは無いであろう。ここで言及されている人物は、もう既に「すべての支配、すべての権威および力」を、空しいものとした方なのである。彼は、自分の敵すべてを、その足下にひれ伏させられたのである。彼は、死を討ち滅ぼされたのである。彼は、神のすべての目的と契約を実現されたのである。神が人類のためになさろうとされたすべての事柄を、彼は、今やメシア的王として、仲介の役割を担うことによって、為し遂げられたのである。そして彼の王としての職務の目的が達成されたからには、キリストは王国を彼の父なる方に、手渡されるのである。しかしながら、これは、これらの目的が彼を通して実現された、という事実には抵触しない。そしてこれらの事柄は、彼以外の何者によっても実現され得ないのである。キリストによって人類のためになされた事柄として表現されている、これらの事柄を、キリスト以外の誰がなし得たであろうか。使徒パウロの心のなかに占めるキリストの位置を、他の誰がいったい占めることが出来たであろうか。他の誰がいったい、修飾語抜きで「御子」と呼ばれ得たであろうか。王国を御父に手渡すという事柄にしても、この「御子」という名前の持っている、唯一の偉大さというものを、割り引くということはな

い。この名前は、キリスト自身が『マルコによる福音書』一三章三二節において語っている敵かな言葉によって暗示している、あの比較を絶した位置に御子を据えているのである。ここでキリスト自身の言葉とされている、『マルコによる福音書』一三章三二節とは、次のような言葉である。「その日、その時は、誰も知らない。天の御使いたちも、また子も知らない。ただ父だけが知っておられる」。ここで「子」と呼ばれているのはキリストのことであり、そのキリストにさえ知らない事柄が存在すると、自ら表明している内容であるので、後の教会によって創作されたものとは考え難いとされている、イエス生前の真正の言葉として、よく例にあげられるものである。ジェームズ・デニーは、パウロの表現すなわち修飾語抜きの「御子」という言葉は、パウロ自身が創作したものではなく、イエス自身のメシアとしての自己意識に基づくものであり、またパウロの信仰におけるキリストの位置を表現している特徴のある表現でもあるゆえに、特に『コリント人への第一の手紙』のこの箇所に従って論述を進めているのであろう。また彼は、このことによって、「キリスト論に関する二つの疑問」のうち「第二の疑問」に対する論議のための伏線として、この箇所を特に選

んでいるのであろう。

ジェームズ・デニーはさらに『コリント人への第一の手紙』から、パウロの信仰においてキリストの占める位置を表現するものとして、三章五節と、一章一三節を取り上げている。この箇所についてジェームズ・デニーは、次のように述べている。⁶⁶『アポロとは何者なのか、パウロとは何者なのか』、というようにパウロは、コリントの信徒たちの党派心を叱責して尋ねている。『彼らは、君たちを信仰に導くために、主がそれぞれに与えたところに従い、仕えた者たちなのである』。ここで彼（パウロ）が主と呼んでいるのは、パウロがいつもそのように呼んでいるキリストのことである。そしてキリストは、その最も抜きん出た仕え人たちとは、まったく対照的に考えられているのである。これと同じ精神で使徒は叫んでいるのである。『パウロは、君たちのために十字架につけられたのか。あるいは、君たちはパウロの名前においてバプテスマを授けられたのか』。彼がここで当たり前前の考えとして思い描いているのは、イエスの御名は、他と比較することができない、他と釣り合いをとることのできない御名であるとする考えである。もしそうしなければ、我々はパウロとアポロを比較することもできよう。一

人は植え、他の一人は水を注いだというように、我々が言おうと思えば言えなくもない。しかし使徒パウロは、そのような比較を建設的な事柄と見做しているわけではない。しかし我々が、パウロとキリストを比較するとすると、話はまったく違ってきて、そのように比較するわけには行かない。つまり、パウロとアポロを比較する場合は違い、パウロとキリストの場合は、人間としての理想的な姿とはこういうものだというような判断では、同じ部類に属するような人間ではないので、このような比較は不可能となるのである。二人の持っている宗教的教えという観点からいうと、競争者としても同労者としても、こうあるべきであるというような一つの基準となる考え方によって、平等に批判され得るような、宗教の教師ではない。……パウロ自身と教会との関係、あるいはアポロと教会との関係は、キリストと教会との関係とは決して類を同じくするものではないのである。もしパウロなりアポロなりが、キリスト教を拒否したり捨て去ったりしたとするならば、疑いもなく教会は彼らを失ったことを残念に思うことだろう。しかし、彼らの欠けた位置を埋めようと思えば、出来ないわけでもなかったであろう。彼らがそこにいなかったとしても、教会はそこに存続し

続けたであろう。使徒たちや、預言者たち、さらには福音の宣教者たちを与えられた、主御自身が、彼らに代わる者たちを、御自身の働きのために興されたであろう。しかし、キリストがいなければ、教会も存在しなかつたであろうし、使徒職などというようなものも、まったく存在しなかつたであろう。我々がキリスト教という名で呼んでいるすべての事柄は、絶対的に彼すなわちキリスト一人に依存しているのである。この側面から見ると、繰り返しになるが、パウロの信仰においてキリストの占めている位置が、如何に独自性のあるものか、ということが理解できるのである。つまり、キリストが存在しなければ、我々が「キリスト教」という名で呼んでいるすべての事柄、すなわち「キリスト教会」とか「使徒」とか「福音」といった事柄の存在の根拠がまったくなくなってしまうということである。そしてさらにこのことを突き詰めて考えると、『新約聖書』それ自体と、そこにおいて見ることの出来る宗教的生活そのものが、もしもキリストが存在しないとなると、それらの存在の根拠をすべてなくしてしまうことになる、ということになるであろう。パウロの信仰においてキリストの占める位置は、このように唯一絶対的な位置なのである。

ジェームズ・デニーは、パウロの信仰におけるキリストの位置を調査するにあたって、最後に『ガラテヤ人への手紙』と『コロサイ人への手紙』を取り上げている。そしてこの両書のなかに、パウロ自身が心悩まし関わった、二つの大きな信仰上の論争の反映を認め、そこにおいてパウロ自身が、自らの言葉ではっきりと意識的に表現している、パウロ自身の信仰を読み取ろうと試みている。ジェームズ・デニーの見解に従って我々もこの箇所を検討すると、次のようになる。まず『ガラテヤ人への手紙』に記されている論争において、実際に急務の問題となつている事柄とは、キリスト教の本質についてである。キリスト者と呼ばれている人々は、パウロであれ彼に敵対していたとされるパリサイ主義的なキリスト者たちであれ、ある意味においては、共にキリストを信じているわけである。そして問題は、完全なキリスト教には、何かこれ以外に必要なものかどうかということである。パリサイ主義的なキリスト者たちにとつては、必要であるということになるわけである。つまりキリストに対する、異邦人的な信仰も、入門期においてはよしとされよう、しかしもしもこれら異邦人の信仰者たちも、完全なキリスト者になりたいたいというのであれば、また自分たちユダヤ人キリスト

者と肩を並べて、メシア的王国の祝福を受け継ぎたいと望むのであれば、異邦人の信仰者たちのキリストに對する信仰も、割礼とモーゼの律法遵守とによって補われなければならない、ということなのである。一方パウロに言わせれば、断固として否ということになる。ジェームズ・デニーは、彼自身の言葉でパウロの反論を次のように纏めている。「キリストこそが、キリスト教のすべてである。つまり十字架につけられて甦らされたキリストである。キリストは、外的側面においては、つまり罪人の救いのための、神による啓示と行為としてとらえた場合であるが、キリスト教のすべてである。また内的側面においては、つまりキリストに對する信仰としてとらえた場合であるが——ここでいう信仰とは、パウロがキリスト者として生きかつ行動し、自身の存在を賭けている、キリストに對する魂の全面的放棄のことなのであるが——このキリストに對する信仰は、キリスト教のすべてである。この単純でありしかも絶対的な真理に對して、何らかの妥協を持ち込もうとするようなどんな事柄も、つまり、一方においてはキリストに對して、また一方においてはそのキリストに對する信仰に對して、それを補うための何ものかを持ち込もうとするようななどのような提案も、

その補うためのものが何ものであれ、まさに福音に對する裏切り行為なのである。そのようなことをすれば、キリスト教の根幹に對して挑みかかることになり、救いという大問題を解決するために必要とされる、神の側における、恵みの充分さと、人間の側における、信仰の充分さという、二つの絶対的な充分さの根幹そのものを揺るがすことになる。そのようなことは、キリストの栄光を空しいものにしてしまい、罪人たちの希望を抹殺してしまうのである。このようにパウロは、事柄を受け止めたのである。『ガラテヤ人への手紙』一章八節に見られる、あの厳肅な強い調子の表現を促したのは、この事柄の故であって、如何なる意味においても、敵對者たちに對する個人的な不寛容によるものではない。へたとえ我々であっても、天からの御使いであっても、我々が君たちに宣教した福音と異なる福音を伝えたとしたら、その者は呪われるべきである。我々にとつて、この表現のなかで興味を引くのは、パウロの信仰においてキリストが占めている位置が、絶対的なものであり、他と共有できないものであるということ強調する時の、パウロの表現の仕方である。彼のキリストに對する信仰にとつては、他の何者も信仰の對象とは認められないのである。そういうのが、

パウロの信仰である。キリストが、彼の信仰の地平を完全に満たしているのである。神に目を向けた生活を送っている靈的人間の一人として、パウロの全存在は、ただキリストだけに依存しており、ただキリストによってのみ決定されるのである。パウロが、この事柄を明瞭に純粹に考え抜いた最初の人物であろうと思われるのであるが、この見解のゆえに、パウロは、生前のイエスと親しい関係を持つことを許された使徒たちに対して、彼自身の見解に同意することを求めることができたのである。ヤコブ、ケパすなわちペテロ、そしてヨハネは、彼パウロと彼の同労者であるバルナバに対して、同志としての認定の徴としての右手を差し伸べたのである。やや長くなつたが、ジェームズ・デニーの纏めている言葉を引用したが、このことから理解できるように、パウロの信仰においてキリストの占めている位置は、如何に絶大なものであるかということと、そのようなキリストの位置を明瞭に純粹に考え抜いた最初の人物は、パウロであつたということである。しかも、そのようなパウロの見解は、ただパウロのみに妥当する個人的見解ではなく、初代教会全体によつて受け入れられた見解であるということを、我々も銘記しておく必要がある。

使徒パウロの生涯における、第二番目の大論争において提起されている問題も、本質的には同じ性質の信仰の問題が、また別の型をとつて提起されたものである。我々がその問題と遭遇するのは、『コロサイ人への手紙』においてであるが、この書簡については既に記したように、パウロ自身の書いたものではないという見解が有力ではあるのだが、ジェームズ・デニーはパウロ自身による書簡という見解に立っているし、またその中には、パウロの信仰の重要な問題が内包されているので、我々も一応パウロの信仰におけるキリストの位置を調査するに際して、きわめて重要な材料を提供してくれるものとして取り扱うことにする。この書簡においてもたしかに律法の問題は登場するのであるが、いまや本当に危険な存在となつているのは、キリストに対する信仰を補うものとしての、儀式的慣習ではなく、程度の差こそあれ、天使的仲介者に道を譲ることによつて、キリスト自身を無しで済ましてしまおうとするやり方である。パウロがこの新しい局面において取つた態度は、我々が『ガラテヤ人への手紙』において見てきたのと同じ態度である。キリストがすべてである、というのがパウロの根本的主張である。我々が「救済」ということを考えるとき、それが依存

している神に対する知識とか、神の存在とかを探求しようとするならば、キリスト以外の何ものに対しても目を向ける必要はないのである。彼において、すべての知恵と知識の宝庫が隠されているのである。彼において、神性の満ち満ちた姿が肉体をとって宿っているのである。まさにこれこそが、パウロによってイエスがどのような存在として考えられていたかということを示す内容なのであり、パウロの信仰においてキリストが占めていた位置は、如何に比類の無い唯一絶対的な位置であったかが伺い知れる内容といえるのである。(以下次号に続く)

注

- (1) James Denney, *Jesus and the Gospel* (New York: A.C. Armstrong & Son, 1909), p.20.
- (2) *ibid.*, p.19.
- (3) *ibid.*, p.21.
- (4) *ibid.*, p.22.
- (5) *ibid.*, p.23.
- (6) *ibid.*, p.24.
- (7) *ibid.*, p.25.